



進まなん

学校
だ
よ
り

新発田市立七葉中学校

新発田市上館乙84番 2

電話 0254-22-3524

令和3年6月30日 第27号

6月全校朝会 校長講話

「1日の大会は、数え切れない日常にあり」 校長 野澤 一吉

下越地区大会が、2年ぶりに行われます。県大会など上位の大会につながる大会です。3年生は、去年の先輩方の思いを胸に秘め、最後の大会に臨むものと思います。



今日は、私のある大会に臨んだ時の経験話します。このようなヘルメットをかぶる競技です。その競技は何か分かりますか。そうです、スキーの大会です。これは、その時の賞状です。



20人位の選手が、一般の部に参加したと思います。スキーの大会は、最初に滑る選手がランキングの高い選手です。当然私は、下位の選手としてエントリーされました。レースが始まると、最初に滑走するシード選手は、転倒やコースアウトが続きました。天候や気温の低さも影響したと思われます。私にチャンスがやってきました。

私は、入賞するかもしれないという思いが生まれました。しかし、私の体は、変調を訴えてきました。極度の緊張からの手足の震え(寒さも重なり)、コースの振り返りも全くできませんでした(スキーの選手は、スタートの前に、滑るコースと旗門を再度把握するためにイメージトレーニングをします)。

原因は明らかです。チャンスをものにしたい、勝ちたいという思いからです。体と気持ち、コースの把握が不十分なままでスタートしました。すると、想像もしない出来事が起きたのです。当時勤めていた中学校の教え子たちがコースに立ち、滑走する私に、大きな声と身振り手振りで「ここは右」「ここは抑えて」などの指示をしてくれたのです。私は、生徒たちから、コースに向かう積極的な気持ちをもたらしたのです。

私は、大会を終えて思うことがありました。なぜ、生徒たちは、私をそこまでして応援しようとしたのか、その理由を考えました。私は、生徒たちが滑る時に何も援助していないのにも関わらず、なぜ、私に手を差し伸べてくれたのだろうか。

大会に臨むまで、私たちは、夜、何か月もの間、胎内スキー場で練習を続けました。みんなと一緒にいた時間は長く、道具のメンテナンス、技術のアドバイス、温かい飲み物の差し入れ、調子のよいときや悪いときの話など、たくさんの時間を一緒に過ごしました。私は、何気ない日々の時間を共にしてきたことが、いざというときの支えになったと思うのです。

さらに、なぜ、これまで経験したことがないほど極度に緊張したのか考えました。その答えは簡単です。私は、当時、大会の目標も立てず、日頃から練習に集中することがなく、何気なく練習を続けていました。スキーは、時間を競うスポーツであり、たった1回のトライアルです。にもかかわらず、時間を意識しない練習、緊張もなく安易な練習を続けていました。いざというときに自分の力を発揮することができるかどうかは、どんな練習をしてきたのかによることが大きいと思います。

公式の大会が始まります。緊張するはずですが、しかし、仲間と一緒にいた時間を振り返り、開催できる貴重な大会にみんなで臨むのです。